

イタリアで見たこと、考えたこと

福谷 茂

アルプスの南から見たヨーロッパ哲学史 これがイタリアに行くにあたって筆者がひそかに立てた研究テーマである。スペインがヨーロッパ近世の廃嫡された長子であるならば、イタリアをいったいなんと呼べばよいのだろうか。「イタリアに関しては、その或る時代や文化の或る方面を除いては、不思議に吾々は概して識る事が少ないのである。此事は特に思想、殊に哲学に就て痛感される所である。」(青木巖、1938)という事情は現在でもほとんど変わっていない。そもそも Eugenio Garin の「イタリア哲学史」をひもといってみても、イタリア哲学という統一的概念を構成することは容易ではない。通常の哲学史ではルネッサンスの後には Vico まで空白、その後また空白で19世紀末から20世紀にかけて歴史主義ないしヘーゲル復興の一端として Croce と Gentile が名前だけ挙げられるというのが哲学史とイタリアとのかかわりになってしまっているのではないだろうか。イタリア哲学そのものの歴史というよりは、むしろヨーロッパ哲学史を新しく、しかも全体として見渡すための、見晴台としてのイタリアというのが、筆者の目論見であった。もとより一年の滞在で確固たる見通しが得られる筈もないが、着眼点を得た点もあるので、ここではそれを述べることにしたい。哲学と哲学者を取り巻く社会的状況ということが先ず関心を引いた。

表面的なことからは始めるならば、我々がイタリアで驚くのは、哲学書の出版が極めて隆昌であることであろう。或る程度の大きな書店、たとえばイタリア全土に展開している Feltrinelli 書店のどの支店を訪れても、哲学書のコーナーは相当の面積を占めている。また Firenze のドゥオーモのすぐ傍にある Marzocco 書店のように現在入手可能な哲学関係書籍をほぼ全て取り揃えている便利な書店さえある。のみならず、キオスクにあたるよな駅の売店においても新聞雑誌と共に Newton Compton という出版社のプラトン、ニーチェやラッセルの多数の著作のほか歴史家ピレンヌの主要著作までが極めて安価なペーパーバックとして売られているのを見出したのは、狐に鼻をつままれたようなと形容するほかない奇妙な経験であった。イタリア以外では筆者は今回はミュンヘン (Hugendubel, Hueber) やパリ (PUF, Vrin, Fnac) の書店を覗けただけであるが、少なくとも店頭に出ている限りにおいて、イタリアの哲学関係出版物はドイツはもとよりフランスよりも更に豊

富であり、いわば横溢していた。イタリア人は本を読まないと断言するのがイタリア人であるだけに、ますます奇異の念を抱くのである。この怪？現象はいろいろな面から説明されねばならないだろう。

イタリアでは本格的な書店はハイカルチャーの拠点であって、日本のように印刷物なら何でも扱うのではない。したがって書店の売り場面積の半分を実用書と漫画とが占めるということはない。これらのカテゴリーは基本的には街頭や駅の売店に委ねられている。この意味で売り場を争って堅い本が駆逐されるという状況は生じない。書店である限りは固い本もまたその場所を保証されている。更に堅い本の中での哲学関係書の位置であるが、これは核心的部分をなしているといえよう。ただし堅い本といってもハードカバーではなく、ペーパーバックの形態をとっているものが大部分であった。たとえば Pisa 大学の Remo Bodei 教授は現在最も生産的な哲学者の一人であるが、教授の全ての著書はペーパーバックとして出版されている。英米の書物によくあるように先ずハードカバーで出してから、しばらくたって学生向けにペーパー版が出るというのではなく、またフランス書のように購入後の製本を予想した仮綴本として出されるのでもなく、当初からペーパー完結型として刊行されるのである。これは当然相当の刊行部数があるということの意味しているのだろう。(イタリアでペーパーとして出ている瀟洒な本がドイツで翻訳出版されると、ドイツ流のクロース装の堅固なハードカバーとなる。1996年に Bodei 教授の *Scomposizioni* が *Dekompositionen* として Frommann-Holzboog から独訳出版された時も同じケースであった。)

このような出版点数の膨大さということは、そもそも社会的に哲学および哲学者が非常に表に出ているということと関わっている。イタリアの新聞は発行部数が少なく政治的立場がはっきりしていてレヴェルが高いというクオリティ・ペーパーの性格を維持しているが、毎朝各新聞を買って文化面を開けるならば、いずれかに哲学者の寄稿を見出さない日のほうが例外であった。わが国であれば当然政治学者や経済学者、社会学者が論じる問題も全て哲学者が論じているというのが正直な印象である。カントおよびライプニッツの研究書によって国際的にも令名の高い Vittorio Mathieu (Torino 大学) は中道右派の新聞 *Il Giornale* の常連寄稿者であり、イスラムのファンダメンタリスト対策、不法難民、ピノチエト逮捕、ミラノ・マルペンサ空港の非効率、政党民営化論、などあらゆる問題について切っ先鋭い論陣を張っているのを読むことができた。(実は単に論ずるだけではない。Mathieu は元首相 Berlusconi の党 *Forza Italia* のヨーロッパ議会議員だし、天使論で知られる Massimo Cacciari は現に Venezia の市長を務め、政変のたびに入閣の噂が新聞に載る。大学教授、特に哲学教授と現実政治との距離が近すぎるというのはイタリアの特殊事情である

とは Bodei も語っていた。) また Bodei や Emanuele Severino は中道左派系の La Repubblica および Corriere della Sera、カトリックの Giovanni Reale や Gianfranco Ravasi の論稿は経済紙 Il Sole 24 Ore の日曜付録で、毎週のように見かけた。

もちろんこのような状況の背後には、それを要求し消費する読者層が控えているわけであり、さらに文系高等学校を中心とする中等教育での哲学の中核的役割という背景が指摘されねばならないだろう。イタリアの教育システムにおいて文系高等学校 liceo classico は伝統的に最重要の機関として位置付けられているが、ここでの哲学教育の重みは、その教科書が分厚い3冊本で構成される哲学史であるという点からもその質と量を窺い知ることができよう。上記の Mathieu を始め、Abbagnano, Geymonat, Dal Pra 等のかつての世代の有名学者たちが十分に彼らの業績のひとつとして数えることが出来る力作教科書を残しており、現在でも次々と新しいものが現れつづけている。最新の傾向は本文に読本をも盛り込むことであり、96年初版の Scuola Normale Superiore 出身の若手 Giacche および Tognini 共著のものは遂に古代中世篇598ページ+近世篇675ページ+現代篇1227ページにも及んで持ち運びすら困難である。このようなカリキュラムの原点には Mussolini 政権の文部大臣に就任した Gentile による教育改革があるとのことであった。因みに旧共産党系の左翼民主党の前首相 Dalem もカトリックの現大統領 Ciampi も、かつて Gentile が校長を勤めた Pisa の Scuola Normale Superiore の出身であり、同校はもっぱら哲学と古典文学を柱とした学校である(後述)。

以上のような事を背景にして筆者が Pisa で目撃したことの一端を紹介したい。Pisa には Pisa 大学と上記の Scuola Normale Superiore (高等師範学校、通称ノルマーレ) という二つの高等教育機関があるが、両者は全く性質を異にしている。日本には対応するものがない後者については後述にして、先ず我々に親しい意味での大学から。イタリアでは大学入試がなく、また入学定員もないため、登録さえすれば高等学校卒業試験に合格したものは誰でも大学生になることが出来る。このため教室に学生がひしめき合うことは珍しくないし、平素の講義のレベルは必ずしも最高度というわけには行かない。ひとつの講義につき一週3コマ(一回1時間) 三日連続のことも多く、それも月火水木に集中している。また学期は11月に始まり、翌年5月末には終わる。しかもその間クリスマス休みがヶ月ほど入る。一学年がずいぶん短いようであるが、そのかわり講義期間中は集中的に勉強する体制になっているとはいえよう。ヨーロッパの古い大学によくあるように、Pisa 大学も単一のキャンパスというようなものを持っておらず、文学哲学学部を構成する各学科が市内の色々な場所に分散している。哲学科のような大所帯はひとつのビルを史学科と共有しているが、中には中世学科のように雑居ビルのようなところに入っている学科もあった。こ

のため異なる学科の講義に出るためには移動が結構大変だった。教官も Bodei 教授のように大学から歩いて5分の Arno 川沿いの一等地にすむ人、史学科の Adriano Prosperi 教授のように観光客で溢れる目抜き通りのすぐ裏の centro storico のひっそりとした一角に住む人もいれば、郊外の小都市 Vicopisano から鉄道と自転車併用で通う同じく史学科の Alessandro Valota 教授（ルーマニアの大歴史家 Nicolae Iorga の孫にあたる日本史学者、夫人は京大文学部出身）、ノルマーレの Cesa 教授のように Siena 在住、更には教会史の Alzati 教授のように遠く Milano 近郊から車で長駆通勤という人までいたが、大学に拘束されている期間が半年以下となると、これでもおかしくないのかもしれない。いずれにせよ、学期中も個人研究室を試験と ricevimento（質問のための予め決められた面会時間）以外に使用している教官は殆ど見かけなかった。教授集会のようなものが開催されていたのは目にしたが、定期的ではなく、またごく稀に開かれるようだった。かわりに学科長が一年ごとの交代で選出され、これはかなりの激務らしく見受けられた。希望すればどの大学でも入れるということに対応して、イタリアでは大学間の格差はそれほどなく、また問題にされていないようである。新聞などで学歴が報道される場合でも、なんの学位を持つかということのみが記され、いわゆる出身大学まで書くことが滅多にないのは、学歴社会でないということではなくむしろこの格差の不在ということに基づくのではないかと感じられた。実際 Pisa は人口10万人足らずの中都市ではあるが、哲学科のスタッフに関していえば、Roma, Milano, Torino, Firenze のような大都市の大学に比して全く遜色がない。

98/99年度の Pisa 大学哲学科の正教授（professore ordinari）は全部で8人。このうち講座としては美学を担当する Remo Bodei のほか、Massimo Barale（カント、サルトル）、Michele Ciliberto（ルネサンス哲学、Firenze の国立ルネサンス研究所所長）、Silvestro Marcucci（カント、イタリア・カント協会の委員長）、Gianfranco Fioravanti（中世哲学史）が講義をしているが、現在中道右翼政党 Forza Italia の国会議員でもあり、時に新聞紙上に政治家として登場する Marcello Pera（ヒューム、科学哲学）、講義をしていない Vittorio Sainati（オルガノンの研究史で有名）も依然名簿には名を連ねている。Wittgenstein 研究で有名な Aldo Gargani は講義はしているが、ここには名が上がっていない。各教授のこの年度の講義題目を上げておくと、サパティカルの Bodei を別にして、Barale：美学と近代性、および倫理における理性、Ciliberto：近世の懐疑論、モンテーニュからホッブズまで、Marcucci：現代フランス哲学における「批判的合理主義」（これは実際には Meyerson の話だった）、Fioravanti：アウグスティヌスと哲学、「アカデメイア派論駁」の読解、Fabris：哲学的反省と若干の宗教的伝統における〈愛〉のテーマ。この他に10人の若手教授が所属して授業を担当し、また ricercatore という名称の多くの研究員のような立場の青年研究者が所属して

いる。若手の講義から例をあげると、Lorenzo Calabi：ヘーゲルの「実在哲学」、Cristina D'Ancona：新プラトン主義とアラビア哲学の形成、Alfonso Maurizio Iacono：ミメシス・遊戯・権力など。これらの講義は全てが「美学」「理論哲学」「政治哲学史」「諸宗教の哲学」（複数形に注意！）というような正式科目名のもとに行われているのであり、結局普通の概論講義はなかった。これは先に触れた高校での教育によってすでに履修済みということになっているということだと考えられる。もちろん「生命倫理」の講義も行われている。また認識論の題目のもとでは、Quine や Davidson が取り上げられており、あくまで哲学史を中心とする哲学観の骨格は守られているとはいえ、決して旧套墨守というわけではない。ただし学生にとっては記号論理学や現代科学についての知識は常識化しているとは言いかねるよう見受けられた。この点は人文科学中心の伝統的な高校カリキュラムの裏目が出たものかもしれない。Feltrinelli 書店での印象でも、哲学書の盛況とは裏腹に、科学解説書、入門書などの点数は日本に比べて少ないように見えた。正教授は全て男性であるが、学生および研究員の世代では女性の進出が目立った。（学生の話では哲学科の卒業生には高校の教員資格が与えられるということで、女性にとっては就職上有利なのだとしたことであった。）名誉教授のうちには、Francesco Barone(論理学史)がおり、故人では Guido Calogero（古代哲学史、特にエレア派の研究で有名）、Giorgio Colli（de Gruyter 版ニーチェ全集の編纂者として著名だが、本来は古代哲学史の研究者）、Armando Carlini（Gentile の後継者）、Enrico de Negri（精神現象学のイタリア語訳者）がやはり Pisa の教授だったことがある。哲学科の機関誌のようなものは持っていないが、Marcucci 教授がカント協会の委員長である関係で、イタリア・カント協会の機関誌：Studi kantiani（1990以来年1冊のペース）は Pisa 大学を拠点にして刊行され、Kant-Studien 同様、Beiheft として翻訳や研究書が出版されている。戦後の一時期は Enzo Paci（現象学）や Ludovico Geymonat（唯物論）、Mario Dal Pra（哲学史全般）がいた Milano 大学や Augusto Guzzo（カトリック）、Nicola Abbagnano（実存主義）、Luigi Pareyson（カトリック）、Norberto Bobbio（政治哲学）を擁した Torino 大学が際立った勢いを示した時代もあったようであるが、Bobbio（終身上院議員に選ばれている）以外の人はずでに世を去り、現在では Pisa と Padova がドイツ観念論の研究では人材が多いという話を Barale 教授はしていた。（ちなみに Barale 教授は若き日に Bologna 大学で近藤恒一教授と親友になられたそうである。）

教室が学年始めは満員であり、だんだんと落ち着くところに落ち着く？のは、どこでも同じであるが、日を経過するうちに感じ始めてきたのは、どうも講義が大学の実体という訳ではないのではないのかということである。試験はすべて口述試験であり、学生が教官の部屋に出かけてその場で与えられたテーマについて、いわば演説を行う。合否の判定もそ

の場で行われる。多数の受講者がいる講義の場合、丸一週間続けてこのやり方での試験が行われることもあるという話を聞いた。問題はもちろんいく通りかが用意され、あとの者が有利になることはない。教官からの質問も発せられる。余り黙りこくっていると、教官側が焦れてヒントを出してくれたりする、という学生側の秘策？も耳にした。Bodei 教授の試験の場合は助手のような女性が立ち会っていたが、これが普通なのかは分からない。大学の核心というべきことはこの試験であり、講義に出るという方法でそれに備えるかどうかということは、個人の選択の問題であるようだ。だから出欠を取るといようなことはイタリアでは思いもよらない。場合によっては、このテーマで試験をしてほしいと教官に申し出て、講義内容とは関係のないことで口述試験を受けることも可能であるらしい。教官はそれに耐えうるだけの学力を持っていなければならないわけである。

ここで話は自ずから Pisa の今ひとつの高等教育機関である Scuola Normale Superiore に移る。校名から想像されるように Paris の Ecole normale superieure を雛型として1813年にナポレオンによって創立され、1988年に建学175年記念祭を迎えたここは、ある意味で大学（1343年創立）の正反対の世界である。入学試験は極めて難しく、合格者のプロフィールが新聞に出たりするエリート校で、文学哲学系と数学物理学系からなり、どちらも一学年は現在20人足らず。卒業生名簿によると、かつてはわずか数名であったようである。斜塔すぐ近くの観光名所、Piazza dei Cavalieri に面する Palazzo della Carovana を本拠として、隣接する Palazzo della Gherardesca を図書館にし、Arno 川沿いに寄宿舎（全寮制）を持つ。この学生は同時に大学の学生という資格をももち、大学の講義にも出席している。98/99年度の哲学関係の教官は、Francesco del Punta（中世哲学史）、Paolo Cristoforini（近世哲学史、特に Descartes、Spinoza、および Vico）、Claudio Cesa（近世哲学史、特にドイツ観念論）の三人。名誉教授としてかの Eugenio Garin が名簿に挙がっているほか、Gianfranco Contini（ロマンス語文献学、批評家として著名）、Michele Barbi（ダンテ学者）、Arnaldo Momigliano（後述）といった大物もこの教授だった。哲学関係では Cesare Luporini（唯物論）と Luigi Scaravelli（カント学者）が Giorgio Tonelli を始めノルマーレで多くの学生を育てた。授業形態は大学とは全く違って、日本の少人数の演習に近い。学生の研究発表を頻繁に織り込んでいる。Palazzo della Carovana の Aula 何がしと高名な学者の名を冠した立派な部屋で行われる授業は大学と違って、一回が二時間かそれ以上を費やす。例えば Vico の Scienza Nuova の新校訂版を準備中の Cristoforini 教授は、年度始めにすでに手元では完成されている新版をフロッピーで配布し、毎回「Vico における Tacitus」というようにテーマを設定しては、学生がフロッピーの利点を活かして用例を洗い出し、調べてきて報告するというやり方だった。イタリアではアルプスの北主導のヨーロッパ統合に対抗す

るかのように近東とアフリカ北岸を含めた＜地中海世界＞の一体性が強調されるのもよく聞いたが、Cristoforini 教授も Vico の中にはヘブライ、キリスト教、グレコ・ローマン、イスラムの4つの文化が見出せるという点をしばしば説いていた。

授業の特色は以上の通りであるが、それ以上にノルマーレの特色はその図書館である。正直言って大学哲学科の図書室はそれほどの蔵書を持っていない。もちろん京大文学部の書庫とは比較にならない。(ただし閉架式の大学付属図書館は古いもの中心に立派だった)これに対して Gherardesca 宮殿 (Dante の神曲地獄篇第33歌に出てくる Ugolino 伯のエピソードの舞台) を丸ごと使っているノルマーレの図書館は感嘆に値した。ここは地上5階地下1階の建物そのものが書庫になっていて、そこに持ち込んである机を使って自由に書架から抜き出した本を閲覧するようになっていて、退出時はそのままにしておけば職員が閉館後片付けてくれる。一筆書いた紙片を残しておけば、翌日戻ってくる時まで現状保存で、すぐ仕事にかかれる。カタログと出納業務はコンピューター化済み。Ugolino 伯一族を監禁したという Gherardesca 自体には確かに入り口がなく、Carovana 宮殿で記帳したあと、わざわざ地下道を通って隣の Gherardesca 地階に移動し、エレベーターであがるという仕組み。15世紀に遡る建物のせい、とにかく部屋の大きさも配置も全く不規則、突如現れる絶壁のような階段、二階層に分けて使っている極端に高い天井を持った部屋、用途も分からない小部屋、問道のような廊下、とさながら迷宮で、暫くは自然に探険になってしまった。最上層の哲学関係のほか、文学史学の膨大な蔵書がいかにもイタリア的な、と呼びたくなる熱意と無造作の混在したかたちで、集められまた収められている。(蔵書60万冊、雑誌4000種)

ここで面白かったのは、ノルマーレに関係した教官たちの旧蔵書が相当あることで、特に私にとっては「最後の polymath」と言われた古代史家、というより学説史学者 Arnaldo Momigliano (1908-1987) の真に瞠目すべき所蔵書 (Momigliano 文庫として別置) を目の当たりに出来たことが眼福だった。これは文庫と言うよりはそれ自体が優に一つの図書館をなすと見たほうがよい規模のもの。どうやって購入したのかというより、いったい個人がこれだけのものをどこに置いていたのが先ず気になった位である。数多の著者献呈本には献呈辞や私信のようなものがはさまれていることも多く、また自分で購入したものには購入場所と年月日が必ず記されており、あの博識の大学者の舞台裏を垣間見る気がしたことである。イタリアの大学は神学部を持たないし、ノルマーレは Gentile 校長の時代も戦後の左翼優位時代も反カトリック的傾向には違いがなかったこともあり、神学聖書学の文献は意外なほど欠落しているが、Momigliano 文庫においてかなり体系的にその欠陥は補われたと言える。Momigliano は長年イギリスで教えただけに、おそらく一万冊に達す

るその文庫の過半は英語文献であり、この点もまたノルマーレにとっては有難いことであつたであろう。そのほか、ドイツ語教師を務めたことがあるという Paul Oskar Kristeller や歴史家 Delio Cantimori の旧蔵書が目立った。

Cesa 教授も Cristoforini 教授もここの出身であるが、幸いにもちょうど98/99年度が現役最終年度であつた Cesa 教授から多くの昔話を伺うことができた。それによると、教授が学生であつた時代にはノルマーレは外国語を除いてはそもそも授業というものが殆どなかったとのこと。各自図書館で好きな勉強をして、随時必要に応じて教官に質問にゆくという仕方ですごしたということである。現在は共学であり、半分近くが女子学生であるが、当時は男子校で、これは戦後の大学紛争時まで変わらなかったとのこと。興味深いことにはノルマーレはもともとは女子学生も受け入れていたのが、Gentile 時代(ここの学生であり、教授であり、校長でもあつた)に男子校とされたらしい。多くのユダヤ系学者を保護したことといい、様々な意味で Gentile はノルマーレの中興の祖のようである。Cesa 教授の記憶によれば、彼の Pisa での住居は Gherardesca の隣、つまり勤務先の目の前に住んで眼を光らせていたわけである。またカント研究者には親しい名である、鬼才 Giorgio Tonelli (1928-1978) はノルマーレで Cesa 教授の一つ上の学年。夜型で体が弱く常に図書館にいたという、彼の肖像写真や仕事からひそかに想像していた通りの回想をうかがった。Tonelli はノルマーレの校長 Leonida Tonelli (数学者) の息子だったとのこと。ノルマーレの卒業生は上記のように政治家や経済人もいるとはいえ、やはり学者になるものが多く、トスカナ州の諸大学 (Pisa, Firenze, Siena) の文学哲学部教官の相当のパーセンテージを占めている。Bodei 教授も、Marcucci 教授も、Prosperi 教授も、その一人である。共通しているのは非常に勤勉で精力的に仕事をする事。これにはやはり学生時代の動機付けが働いているように思える。先ず研究方法やプレゼンテーションについて徹底した訓練を受けることから始まる点が大学とは違う、というのが現役学生の話だった。裏から言うと、このような教育を好まないタイプの学生は能力があつてもノルマーレを選ばないということはあるようである。Bodei 教授もそう言っていた。で、ここを出た学生がどのようにして大学教授になってゆくのか、ということである。興味あるのは、Cesa 教授をはじめとして若い頃文系高等学校 liceo classico の教授をした経験を持つ人が多いこと。イタリアでは高校の教員はかなりの程度研究職的色彩があるようだ。研究活動を続けながら、文系高等学校勤務で終始するという人もいる。これは日本のように学校に何から何まで背負い込ませないので、初等中等教育の場にも十分のゆとり(教師の!)があることに支えられているのだろう。だいたいイタリアでは高校も午前中だけで授業は終わるのである。

さて、このような環境のもとにあるイタリアの現代哲学であるが、Mathieu がその現代イタリア哲学史を「ヘゲモニーの崩壊」と題する章から書き始めたように、Croce と Gentile の時代が去ったということが、つまり圧倒的な存在が消え、イタリア哲学が同時代の哲学の頂点を達成しているという確信が消失した時点が、現代イタリア哲学の始まりだといえるだろう。50年代、60年代に指導的立場にたったのは、先に触れたように、伝統的にフランスおよびドイツと深い文化的つながりを持つ北部ピエモンテ州の Torino 大学やロンバルディア州の Milano 大学であろうが、現在では、そのようなリーダーシップすら見当たらないようである。イタリアにおいてもコスモポリタニズムが戦後の哲学界を特徴付け、マルクス主義、実存主義、構造主義がイタリア的に消化されることがイタリア哲学自体の在り方を意味した時期は確かに存在したが、それらのどれももはや主導性をもたない。そのかわり戦後のイタリア哲学界を戦前のそれから鋭く区切るのは、Mathieu や Vattimo も認めるように、ヨーロッパの他のどの国にも見られない開放性である。ヨーロッパ各国とアメリカ合衆国のみならず、南アメリカ諸国から京都学派までなんらかの形でイタリアには研究者が存在し、翻訳が出版されている。つまり現代イタリア哲学のなかにおいて耳を澄ませば聞き取ることができる様々な声を形成しているのである。このような現況をイタリア人たちは幾分の自嘲をこめてキケロ以来の折衷主義と形容するが、実のところ、この折衷主義こそがアルプスの北には却って求めがたい文明の懐の深さであると私には思われる。このような前提と環境のもとで、現代イタリア哲学の特色は、アルプスの北の近世ヨーロッパで実体化された旧来の「学」としての哲学という概念に固執することなく、むしろ文化現象の全体に関わりうるような柔軟な感受性の涵養とそれを表現するための醒めた言葉の訓練という、「弱い」、しかし懐の深い使命を果たしている点に見出すことができるだろう。

〔京都大学助教授〕